

日本語の進歩が実感できる簡単な評価の方法を

9月17日

はじめに、読む、聞く、書く、話すについて、それぞれが関心の高いことについてアンケートを取ると、聞く（2）、話す（10）、読む（7）、書く（7）であった。

続いて、研究員から各自が作成中の評価シート（読む、書く、聞く、読解、話す）について説明（一人2分半）

以下は、部会中のチャットの内容です。

文科省・国教課 眞岩（傍聴） に 全員 0:06

文部科学省国際教育課の眞岩といいます。皆さんご発表どうもありがとうございます。

時間がないので先に質問（主に雨宮様への）をこちらでお送りしておきますが、弊省が作成している JSL()や DLA を使うことができないのはなぜなのでしょう？

日本に来て週のほとんどを日本語に囲まれて暮らすことと、外国にいて週のほとんどを所在国の公用語に囲まれて暮らすことでは、日本語に対する言語発達の在り方が違うので使いづらいということなのでしょう？

それとも人材や時間などのリソースが足りなくてできないのでしょうか？

宮崎梓@チューリッヒ補習校 0:09

眞岩様、個人的な事情ですが、海外在住の教員はこれまで JSL、DLA について学ぶ機会が非常に限られており、クラリネット等サイトは読んだことはあっても理解度が非常に低いです。10月からの DLA 研修に参加する予定なので、理解が進んだら補習校に使えることを考えていきたいと思っています。

文科省・国教課 眞岩（傍聴） 0:15

宮崎様、ご回答どうもありがとうございます。

こんなことを言ってしまうと良いのかわかりませんが、日本国内でさえも DLA の普及は完璧に順調に進んでいるとは言い難い現状があります。とは言え、通じる部分はあると思いますので、部分的にでも使って／参照してもらえると良いかと存じます。

雨宮

本部会の評価方法開発の目的は、各資格定試験や DLA のように学習者の言語運用能力を測定するものではなく、日々の授業で扱う単元の教材を使用しながら力を伸ばしつつ、学習者が日々の力の進歩を実感することです。DLA 等で教師が学習者の言語運用能力のアセスメントをもとに授業計画を立て、日々の授業でパフォーマンス課題を実施し、評価するという流れです。

ダラス補習授業校 ウッドアード エリカ 0:12

ダラス補習授業校では国際部入部、転入テストで使用しております。試験者のトレーニングが必要ですので、簡単に出来るという感じではないかもわかりません。

発信者不明

毎回DLAのテストをするかどうかという点と、その考え方を応用するかどうかという点は少々別の話ではないかという気がしております…。